

漁業経済学会 短 信

【第57回大会開催案内】

■ 開 催

場 所：東京海洋大学品川キャンパス 東京都港区港南4-5-7
事務局：工藤 貴史 (TEL&FAX 03-5463-0569 kudot@kaiyodai.ac.jp)
日 程：2010年5月28日～30日

■ スケジュール

5月28日(金)

16:30-17:30 学会賞選考委委員会 8号館208号室
16:30-17:30 会計監査 8号館509号室
18:00-20:00 全国理事会 8号館203号室

* 理事会出席の方は夕食をお済ませになられるかお弁当をご持参頂くようお願いします。
参考：学会賞選考委員会—加瀬和俊(代表理事)、濱田 英嗣、廣吉勝治、若林良和、
婁小波、田坂行男、馬場治

5月29日(土) 開場8:40-

9:00-11:45 一般報告第1会場 8号館203号室
一般報告第2会場 9号館203号室
11:45-13:00 昼休み
13:00-15:00 一般報告第1会場 8号館203号室
一般報告第2会場 9号館203号室
15:00-17:00 総会 8号館203号室
18:00-20:00 懇親会 大学会館食堂ホール

5月30日(日) 開場8:40-

9:00-17:00 シンポジウム 楽水会館鈴木善幸記念ホール

■ 大会参加費

大会参加費：2,000円
懇親会費：4,000円

■ 参加申込方法

事前申し込み制とします。参加費、懇親会費は同封した払込取扱票で納入してください
ますようよろしくお願ひします。また、併せて、2010年度会費も徴収しますのでよろしく
お願ひします。当日受付もいたしますが、事務局の負担を軽減したいので、会員の皆様には
事前申し込みへのご協力を宜しくお願ひいたします。

【一般報告会プログラム（5月29日）】

報告時間：報告 20 分、質疑応答 10 分

〈第 1 会場〉（8 号館 203 号室）

開会（9：00-）

第 1 報告（9：15-9：45）

東京湾におけるアサリ漁業の再生

松浦 勉（水産総合研究センター）

第 2 報告（9：45-10：15）

わが国のサケ、マス養殖業について

大塚 秀雄（会計事務所・公認会計士補）

第 3 報告（10：15-10：45）

サンマ漁業における船型間の対立構造と生産調整のインセンティブ構造 -ゲーム論的視点から-

松井 隆宏・中嶋 康博（東京大学大学院）

第 4 報告（10：45-11：15）

漁業者高齢化の社会経済要因分析

山下 東子（明海大学）

第 5 報告（11：15-11：45）

沿岸漁船漁業における陸上労働の変遷 -統計資料分析を中心に-

佐藤 尚紀（東京海洋大学大学院）

第 6 報告（13：00-13：30）

譲渡可能個別漁獲割当の所有の推移とその構造 -ニュージーランドの ITQ 制度を事例に-

大西 学（立命館大学）

第 7 報告（13：30-14：00）

水産庁による新たな燃油価格等の補てん事業について -価格変動に備えた経営安定対策の展開-

桜井 政和（水産庁漁政部）

第 8 報告（14：00-14：30）

「出資金が返せない」-小規模漁協は何処へ行くのか

濱本 俊策（香川県農政水産部水産課）

第 9 報告（14：30-15：00）

どうなる、これからの日本漁業

岡本 勝（（社）いわし食用化協会）

〈第 2 会場〉（9 号館 208 号室）

第 1 報告（9：15-9：45）

マグロ類の漁獲規制と価格への影響

多田 稔（近畿大学）

第 2 報告（9：45-10：15）

台湾における刺身マグロの消費動向

玉置泰司（水産総合研究センター）

第 3 報告（10：15-10：45）

ズワイガニ市場における対日輸出の減少と中国再加工

東村 玲子（福井県立大学）

第4報告(10:45-11:15)

長崎魚市の取り組みにみる、中国向け鮮魚輸出の可能性と課題

栢木 誠(埼玉大学)

第5報告(11:15-11:45)

リーマンショック前後におけるサバ産地の輸出対応とその課題 -長崎県松浦地区を事例として-

張 溢卓(東京海洋大学大学院)

第6報告(13:00-13:30)

消費地卸売市場における「市場開放」の実態 -水産物流通における意義の考察-

久賀 みず保(鹿児島大学)

第7報告(13:30-14:00)

生産者と消費者のインタラクティブな水産物販売における実態と課題 -直販所JF糸島「志摩の四季」を事例に-

田中 佑佳(東京海洋大学大学院)

第8報告(14:00-14:30)

インドネシアにおける沿岸漁獲物の流通構造 -インドネシア南スラウェシ州ボネ島の事例から-

酒井 紀久子(東京海洋大学大学院)

第9報告(14:30-15:00)

カツオ節産業の構造と変化 -二次加工と消費を中心に-

片岡 千賀之・ウィリーマンチョロ(長崎大学)

【シンポジウムプログラム(5月30日)】

「養殖漁場の制度と利用実態—実情把握と評価の試み」に向けて

コーディネーター 加瀬和俊(東京大学)

2010年5月の大会シンポジウムでは、養殖漁場の現状を把握することを課題とするが、こうした課題を設定するのは、養殖漁場をとりまく事情がかつてとは相当大きく異なってきたという認識にもとづいている。

養殖漁場の利用実態が経済的に効率的であるか、社会的に公正であるか、あるいは技術選択的に柔軟であるかといった問題群は、事新しく取り上げるまでもなく、養殖業が始まって以降、一貫している伝統的な難問であるといえる。しかし、かつて「過密養殖」が養殖業の宿痾と見なされていた段階とは大きく異なっており、経営体の減少、余儀なくされた規模拡大、選択的な企業進出といった状況の下で、現実の養殖漁場利用がどのような様相を呈しているのか、それはどのような経済論理によってもたらされており、現在はどこに向かう過渡期にあるのかといった問題を改めて問うことが求められている。

いくつかの養殖業における企業的展開を高く評価する立場からは、その方向を促進するために漁場制度の改変を展望した提案も出されているし、一部では家族経営の共同化を越えて漁協自営の養殖業を展望している事例も見られる。また、顕在化しつつある空き漁場の評価にあたっては、過密養殖の解消としてこれを歓迎する見解から、漁場制度の難点の表れとして制度改定の必要性を強調する見解まで、受け取り方は多様である。とはいえこうした提案の可否を判断するための実態把握が満足すべき精度で提示されているわけではない。

こうした状況の下で今回のシンポジウムでは、代表的な養殖業における漁場利用の実態把握と、行政の側から望ましい漁場利用への誘導措置の双方に着目して、現地の関係者の営為を広い視点から議論してみることとした。

〈プログラム〉

解題 (9:00-9:15) 加瀬和俊 (東京大学)

第1報告 (9:15-9:45)

マグロ養殖への資本参入と特定区画漁業権漁場の利用実態

鳥居 享司 (鹿児島大学)

第2報告 (9:45-10:15)

ブリ類養殖業における大規模経営における漁場の利用実態

佐野 雅昭 (鹿児島大学)

第3報告 (10:15-10:45)

マダイ養殖業における小経営的漁場利用と経営問題 —三重県を対象に—

長谷川 健二 (三重大学)

第4報告 (10:45-11:15)

ホタテガイ養殖業における漁場利用再編の動向と論理

宮澤 晴彦 (北海道大学)

第5報告 (11:15-11:45)

ノリ養殖漁場の賃貸借問題が提起する漁業管理の現代的課題

日高 健 (近畿大学産業理工学部)

第6報告 (11:45-12:15)

地域営漁計画に基づく養殖漁場の効率的な利用について

山口 浩史 (岩手県沿岸広域振興局水産部)

昼食 (12:15-13:15)

コメント (13:15—)

討論会

閉会

〈各報告の要旨〉

第1報告:

マグロ養殖への資本参入と特定区画漁業権漁場の利用実態

鳥居 享司 (鹿児島大学)

近年、特定の漁業部門において大手資本の参入が相次いでいる。その特定部門とはマグロ養殖である。マルハニチロ、ニッスイなどの大手水産資本に加えて、双日、三菱など総合商社も生産段階への参入を果たしている。海外におけるマグロ漁獲規制の強化、「国産魚介類」への根強い需要、アジア市場への期待などを背景に、マグロ養殖は「儲かる事業」と見なされ、大手水産資本の参入と生産規模拡大が進められている。さらに生産から販売の系列化が進んでおり、国産養殖マグロを大規模に取り扱うためには生産段階への参入が欠かせない。こうした事情もあり大手総合商社の参入も相次いでいる。

一方、生産地においては、漁協や地方自治体を中心になって大手資本を誘致する動きも見られる。長崎県のように県を挙げてマグロ養殖業の育成に注力する自治体も見られる。その背景には、漁協経営や地域経済の悪化がある。既存漁業の弱体化によって漁協の経済事業は先細りの様相を呈し、さらには漁業を基盤とした漁村経済は疲弊の度合いを強めている。漁業権行使料の徴収や購買・販売事業などの利用促進による漁協経営の改善、雇用機会の創出を通じた地域経済の活性化などに期待して、大手資本を誘致しているのである。つまり、高い収益が期待できるマグロ養殖への参入を目指す大手資本、大手資本からの経済的効果に期待する生産地、両者の思惑が絡み合いながら大手資本の生産段階への参入がすすんでいるのである。

しかしその一方で、既存漁業の漁場利用体系への影響を看過することはできない。大手資本がマグロ養殖を展開する「場」は共同利用の漁場である。生産活動の弱体化が指摘さ

れるとはいえ、そこには既存の利用体系が存在する。地域経済のため漁協経営のためのという名目のもとで拡大を続けるマグロ養殖業が、一方では地域漁業の漁場利用体系と漁業生産構造を変化させる事態が散見されるのである。

本報告では、マグロ養殖への資本参入とその後の生産活動が、漁場利用関係へ与えた影響を明らかにする。まず、マグロ養殖部門における資本参入の実態について概観する。次いで、長崎県五島市、鹿児島県瀬戸内町の事例分析を事例としてとりあげる。ともに漁協経営や地域経済の改善を目的にマグロ養殖の規模拡大に積極的である。期待した経済的効果を確保する一方で、漁場利用をめぐるいくつかの課題が浮き彫りになった地域でもある。これらの事例分析を通じて、マグロ養殖への資本参入が漁場利用に与えた影響について明らかにする。

第2報告：

ブリ類養殖業における大規模経営における漁場の利用実態

佐野 雅昭（鹿児島大学）

1. 問題意識と報告の目的

ブリ類養殖業の経営は、成魚販売価格の下落及び餌料コスト増大などの理由により長期的かつ深刻な低迷状態に陥っている。一方、これまで経営改善の1つの方向性として、大規模化による生産コスト削減の有効性が常々議論されてきた。また現実にも淘汰と再編の過程の中で、経営規模が拡大しつつある。こうした経営スタイルの展望や可能性を真剣に検討しなければならない時期に来ているものと思われる。本報告ではこうした問題意識に立ち、現実に規模拡大を図ってきた事例における漁場利用に焦点を当て、経営規模の拡大が養殖漁場の利用や個別の操業過程にどのような変化と影響をもたらしているのか、を明らかにしたい。

2. 研究・調査の対象

報告では宮崎県串間地区を中心として取りあげる。ここでは現在大手水産企業の子会社であるK社がブリ類養殖を経営しているが、当社は日本最大の養殖企業であったT水産を引き継いだものである。T社は、ピーク時における年間生産量が約230万尾、11,000トンを超える巨大養殖企業であった。K社に事業譲渡されてからは規模を大きく縮小させており、2009年度における生産量は約90万尾、約4,000トン程度となっている。しかしそれでも単一企業として日本最大のブリ類養殖経営体であることに変わりはない。

3. 報告の概要と論点

(1) 特定区画漁業権の行使状況とその獲得過程

当地区では1974年に区画漁業権が設定され、ブリ養殖が開始された。しかし小規模零細経営体は廃業が相次ぎ、やや規模の大きな経営体に漁場が集積されていく。そして外部企業の参入と脱退、事業譲渡を繰り返しながら、現在ではK社とM社の2社による漁場分割利用体制に行き着いている。またこの過程の中で、K社は沖合における新規漁場の取得を漁協に希望し、漁船漁業との軋轢が発生した。しかし漁協はK社の希望を受け入れ、漁場拡張を認めてきた。一方K社はこうした経営維持のために、高水準の漁業権行使料そして販売手数料を支出している。

(2) 規模拡大による漁場利用様態の変化と意義

K社では、多様な漁場環境におかれている多数の生け簀を飼育ステージに応じて使い分けることで、全体として機能的な漁場利用を実現している。また当社は大きく離れた3箇所に漁場を保有して生産規模を維持しているが、養殖漁場の分散的保有は作業効率の低下をもたらしてはいない。むしろ漁場の分散保有が経営上のリスク分散に寄与している。

(3) 漁場管理上のメリットと課題

広大な漁場を独占的に使用することで、養殖環境モニタリングや効率的な魚病対策の立案など、漁場環境管理を経営的立場から行えることはメリットがある。しかし区画漁業権漁場の管理者である漁協との機能分担が不明確となっており、整理が必要であろう。

第3報告：

マダイ養殖業における小経営的漁場利用と経営問題 —三重県を対象に—

長谷川 健二 (福井県立大学)

本報告は、小規模経営が層厚く堆積している三重県の南部の志摩度会、および熊野灘の養殖漁村地域をとりあげ、空き養殖漁場化が進行する中での漁場利用を巡っての再編成と小規模経営の論理との対抗・対応の実態を分析する。その場合に、基本的には、特定区画漁業権の行使規則に基づき免許主体としての漁協による新たな漁場の配分が行われてきていると思われる。しかしなかには、漁村全体として養殖業者の減少が著しくなる中で、地元漁村外の業者、あるいは漁村外の企業などに貸借している場合も見られるようになった。本報告では、現在、進行中のマダイ養殖漁場利用の実態を整理し、いくつかのパターンを抽出し、小経営的漁場利用と経営主体という視点から分析を行う。

第4報告：

ホタテガイ養殖業における漁場利用再編の動向と論理

宮澤 晴彦 (北海道大学)

噴火湾のホタテガイ養殖業は、漁場利用面で近年大きく再編が迫られる状況にある。それは第1に、生産過剰化とそれに伴う生産物価格の低下、採苗・成長不良、へい死の発生など、漁場利用面でのリスク管理が本格的に求められる状況があるということである。また第2に、昭和一桁層のリタイア等による養殖漁家数の減少が近年特に顕著となり、それによって空いた養殖施設の再配分が求められているという事情がある。

このような状況下で、特定区画漁業権漁場の管理形態に、地域によって異なる対応が現れてきた。この報告では、そうした異なる対応の見られる典型事例として噴火湾の八雲地区と長万部地区を取り上げ、両地区における漁場管理の実態を比較しつつ転換期における特定区画漁業権漁場利用・管理のあり方について検証する。

さて、この2地区における漁場利用・管理の実態だが、そのうち八雲地区では残存漁家の規模拡大を図りつつも家族労作的経営を基本として平等主義的漁場再配分が行われており、合わせて3年貝生産の導入を含む漁場利用の過密化を抑制するための堅実な漁場管理対策が取られる。ここでは空き施設の発生を契機に、小規模漁家（特に後継者を有する漁家）の底上げが図られたのである。

一方、長万部地区では養殖施設保有規模の上限規制を緩和し、資力のある特定個人が空き施設を事実上無制限に買い取ることが容認されている。また、その結果として個別養殖漁家の規模格差拡大と大規模経営の利用施設範囲の拡大（分散錯圃の状況の深化）がもたらされている。

問題はなぜこのような相違が生じたのかという点と、経営・経済的視点から見た両者の評価、及びその将来展望であろう。特に長万部地区にみられる大規模経営がどの程度の経済的優位性を有するか、それが地域の中小規模経営を駆逐して一般化していくかが問題とされる。これらの点については簡単に結論を出しにくいですが、ホタテガイ養殖の場合、筆者は大規模経営の優位性や両極分解の必然性は乏しいと見ており、多数の家族労作的経営を収容しつつ、一定の合理化を図る漁協の漁場管理に有意性（あるいは一般性）があるものと考えている。

第5報告：

ノリ養殖漁場の賃貸借問題が提起する漁業管理の現代的課題

日高 健 (近畿大学産業理工学部)

福岡有明海区のノリ養殖漁場（第1種区画漁業権漁場）では、1960年代からの40年以上にわたってノリ小間（ノリ養殖の基本区画）の賃貸借問題、いわゆる「羽織問題」が存在してきた。実際にノリ養殖経営や養殖作業に従事せずに地代を手にする者が「羽織漁師」と呼ばれる。不在地主の存在は漁場の民主的な利用を阻害するとして、漁業制度改革（明治

漁業法廃止と新漁業法制定の制定)の際に課題となったものの一つである。漁協の意思決定をゆがめたり、他産地にはない不要なコストとして養殖経営を圧迫したりといった弊害がある一方で、長い間存在してきた根底には否定しがたい経済合理性、いわば必要悪が存在したことがあげられる。

福岡県と同県有明海漁業協同組合連合会(以下、漁連)は、1997年から小間貸貸借の問題解決に着手し、2003年から本格的な解決策を導入した結果、2008年に全面的な解決に至った。解決策の要諦は、小間貸貸借の経済合理性を制度的・合法的に維持しつつ、固定化した権利関係を解消することにあった。

小間貸貸借の発生は当海区独特の条件に起因するものではあるが、この問題の根底にあった構造は、①漁連と漁協による管理の二重構造、②固定化する権利の流動化に関して、極めて現代的な示唆を与えている。つまり、漁業権者である合併漁協と行使権を持つ旧漁協の二重構造は、現在、どこにおいても発生しうる問題である。また、漁業管理の手法として有力視されているITQは初期の配分によって固定化しかねない行使権をどうやって流動化するのかという問題を提起する。

この報告では、当海区における小間貸貸借の経済的合理性を中心に発生メカニズムと解決策を検証することにより、先の二点を中心に合理的効率的な漁場行使の在り方、さらには漁場管理の制度が備えるべき要件について検討する。

第6報告:

地域営漁計画に基づく養殖漁場の効率的な利用について

山口 浩史(岩手県沿岸広域振興局水産部)

岩手県では、ワカメ養殖を中心に海面養殖業が盛んに行われており、養殖経営体数は平成18年に2,591経営体と、全国でも2番目に多い。

しかし、その数は大きく減少しており、近年、海面養殖生産は低位に推移している。

養殖施設数も20年間で3割弱減少しており、養殖漁場の生産性が低下している。

岩手県内の漁協の多くは、集落単位で組合員に対して漁場の配分を行っており、養殖経営体の減少とともに、特に外洋性の漁場で空き漁場が発生しているが、そのまま放置したり、養殖施設の間隔を広げるなどで漁場を利用しており、養殖経営体が減少し漁業就業者の高齢化が進む集落では、漁場を効率的に利用する仕組みがない状況にある。

このため岩手県では、平成18年度から地域営漁計画の取組みを開始した。地域営漁計画は、①効率的な漁場の利用、②担い手の確保育成、③水産物の付加価値向上と販路開拓の3項目について、具体的な取組項目と目標を掲げて実行に取り組む漁協の計画である。

地域営漁計画は、免許を受けた区画漁業権の効率的な利用等に関する計画を漁協自ら策定し実行することにより、漁業者が中心となって養殖漁場の適切な管理や担い手の確保育成を図り、養殖水産物を安定的に生産・供給することを目的としている。

本報告では、空き漁場となったワカメ養殖漁場を漁協が主導して効率的に利用している広田湾漁協の事例を紹介する。広田湾漁協は、平成15年度に陸前高田市内の5漁協併じた漁協であるが、旧広田漁協地区では、養殖ワカメの生産を維持するため、通常養殖経営体の他に、養殖ワカメ協業体を平成12年度に組織し、また、通常販売形態とは異なるワカメの販売方法等を導入する、通称「パイロット漁家」を育成し、特定の養殖経営体の規模拡大を図っている。このような取り組みにより、広田湾漁協の旧広田町漁協地区では、平成21年度には、地区のワカメ養殖施設のうちワカメ養殖協業体が約2割、パイロット漁家が約4割の施設を使用するまでになっている。

広田湾漁協では、地域営漁計画を用いて養殖漁場の利用について組合員を指導・説得し、ワカメ養殖協業体の規模拡大や養殖施設の整備等を図ってきた。

漁業就業者の高齢化と減少が進む中で、区画漁協権を管理する漁協が地域の漁業をどのように維持発展させていくのか、主体性を持って取り組む必要がある。

【出版物・報告書の紹介】

みやび・つかさ＝辻雅司著『バイオサイエンス小説・禁断のメタン菌』

農林統計出版（2009年7月発行）

定価 1600円＋消費税

環境リサーチ会社・マリンリサーチ社の平戸勝は、日本海洋大学の同級生である海洋ジャーナル社記者の葉山雄二に、地球温暖化の進行を防止するためのクリーンなエネルギー源であるメタンガスを効率よく発生させるスーパーメタン菌の開発に助言を求める。葉山は、生物資源科学大学の美人教授を紹介する。美人教授の助言に基づき、マリンリサーチ社では、日本各地や米国フロリダ、小笠原海溝、極東シベリア、スコットランド、ハワイ島へと調査チームを送り、原始的な古細菌の収集を行い、集めた古細菌メタン菌をもとに、高効率なメタン菌の開発にしのぎを削る。しかし、この開発を知った准大手のゼネコン水上建設は開発を横取りし、開発を急ぐあまり違法な手法である遺伝子組み換え技術により、メタンガスを驚異的に生成するウルトラ・メタン菌を開発する。だが、開発途中に誤ってウルトラ・メタン菌は鹿児島県の錦江湾に漏れ、鹿児島県の養殖場、三重県四日市、静岡県田子の浦の海の海底から大量のメタンガスを発生させる。特に四日市沖では、発生したメタンガスに引火し、コンビナートを火の海と化し、壊滅させてしまう。SF小説でもあり、現実性を帯びた内容のバイオ・サイエンス小説である。

目次は鹿児島桜島沖の養殖場／三重県四日市港／東京JR新橋駅前広場／生物資源大学／山中研究所／マリンリサーチ社会議室／田辺博士の自宅／銚子信頼フーズ社／房総ガス資料室／極東ロシアハバロフスク ペドロハバロフスク空港／金鉦の町マガダン／永久凍土／横浜海洋開発研究所分室／小笠原海溝生活環境研究センター／スコットランド／東京JR新橋駅烏森口／ハワイ島ハワイアン・アバロニ社／サイコロテック社／マウイ島バイオ・ディーゼル社／バイオエース社／すばる天文台／山本興産の社内研修会／北海道アース・アイランド研究所／福岡山本興産本社／ゼネコンからの圧力／水上建設会議室／葉山の自宅／水上建設の社長室／内閣府対策本部／水上建設の記者会見／静岡県田子の浦／バック・ツ・ザ・フューチャーとなっている。

小説の最後には10年後、ウルトラ・メタン菌によって漁船は、漁村地域の残さを原料にメタン菌生成ガスを燃料に運航されており、漁船メーカーでは、イカ釣り漁船がイカの内臓を燃料にしていることから「塩辛船シリーズ」、カツオ釣り船は「酒盗船シリーズ」と呼んでいる。会員である辻雅司の初の小説。

【出版物・報告書などの紹介文の募集】

短信に出版物や調査事業報告書等の紹介文を掲載します。掲載を希望する方は、タイトル、出版社および紹介文章（800字程度）を事務局（工藤）まで提出してください。

それ以外にも短信に掲載希望の原稿等がございましたら、事務局（工藤）までご連絡ください。

学会短信 No. 117

2010. 4. 20

漁業経済学会事務局（総務：工藤 貴史）

〒108-8477 東京都港区港南4-5-7

東京海洋大学内

TEL & FAX 03-5463-0566

e-mail kudot@kaivodai.ac.jp